



Title	＜翻刻＞入江昌喜 久保之取蛇尾 後篇 下
Author(s)	
Citation	語文, 18, p. 25-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

久保之取蛇尾

後篇

下

久保之取蛇尾

俚諺雅証目錄

からすき すだ／＼
なで切り
いつかひ
手足えびのやうな
御内方
水の米
手ごろ
ふところ子
いねつむ
福引
手まり
いしなご
おつぽ
節分の杓いはしの頭 鰯ヲ喰
つめたき
いひかはし
手をおつかき足をくはびら

たしなし
うちまき
酒酔本性わすれず
手振り
よそう
酒のかん
そで
小豆粥にて札を押し
はねつきかぞふる
はじき
ひゝな遊び
なぞ／＼ 訓義
こはだか わゝしき
うちがひ
手をすつて頼む
手足をえた

女をうまそうな
さめ／＼と泣 おしく／＼
おひ／＼
繩にもかゝらぬ うつけ
へつゐ
あつかまし
舟のあし
たぶさ
ちやうしがしら
所ぼつそく
きう／＼いふて笑ふ
おとしたね
ほゝかまち はる
みゝずかき鳥の足形
せはしい
大こく
あはひの貝の片おもひ

玉むしの恋
口あかさぬ
ゑいや／＼
千箱の玉
恋 ばか
尻ふる
おき おきをわるを忌ム
ふすべる すねる
せゝなぎ
めかけ
何ヅク
ゆかは
てゝ
ほゝづきふく
人の情は世にありし時
づぶり ざぶりと
だふと

しぶく

わらすべ とうしみ
おすへる

ほくばる

あたゝき 井シャリ

牛に引れて善光寺参

替る詞によろくと云

きのふ あす あさつて

寸白虫国の守になれる語

井坂迎ヒ

あみざこ

紐をひほといふ

こなす

露ちりほど 露ほど

かひつくる

どつこも 狂歌

ふさふ ふさはぬ

さいで

子を捨る藪はあれど

よんべ よさり

色めく

しこぶち

久保之取蛇尾

何事もふるき代のみぞしたはしき、今やうは無下にいやしたゞいふ言葉もくちをしうこそなりもて行なれといひしも、すでに四百年のむかしへとなれば、いよゝ世くだちゆくまゝにみづかきの久しき代よりいひつぎし、いそのかみのふることは今の世のことはぐさの、其苗をみだすがことくのみなりゆけは、草葉の露の玉／＼に、いにしへのことぐさのこれるもあれど、それはそれとだに、知る事なきぞくちをしきや、そも／＼あがくには、外国とはことにして、かけまくもかしこきあまつひつきしろしめす事の、まさ木のかつら長くたえすしておましませはこそ、千早振神代のことの葉も、今につたふるはあるなるへし、華夷かはる／＼おさむる国などはかくあらんやは、さればいやしきすが口のはにも、いにしへのこの残れるは、いとめてきたためしにこそとおもふに、是をかいあつめんの心つきて、さきにもいさゝか其端しをしるし今猶ふる言をひろはんとすれと、世のこの葉のさはなる中に、うどんぐゑをもとむるがことし、まことにくだをもて空をうかゝひ一ツのけしもわたつみを汲んとするにひとしく、水海にしはたるばかりをさなきすさひとぞいふへけれど、干さとの道も足もとよりとこそきけ、海河は細きながれをいとはずとぞいふめるいさゝかも今の言をもていにしへをおし、いにしへの言を見て今をしへは是いにしへをこのむのはし成へし

○神代紀素戔鳴尊乃以韓劔、劔、蛇とあり、其劔の形、今農具の犁と、いふ物に似たる故の名なるへし、しからば今の犁てふ物、既に太古にもありて、後劔にも名付し成へし、いと久しき物なり、又今俗物を切て段々とするを、すだ／＼に切るといふも同卷に寸斬其蛇とあり、又俗物をなで切にするといふも、古語なり、旧本今昔物語卷廿三云、此薯蕷ヲ撫切リニ切ルと云々（頭書、日本紀纂疏曰韓劔猶犁也劔形類犁云々）

○今俗物の少^{ナキ}を、たしなし、たしない、なといふも、古事記仁德天皇段云、於國中烟不^タ発、国皆貧窮^{マツレクシナ}云々、又、日本紀にも、仁德天皇六十七年○布^レ德施^レ惠以振^ニ困窮^一云々、たしなきの俗語古語なる事知るへし

○女子の詞に、物の大^キなるを、イカヒといひ、或はイツカヒと云、大系図に紀氏 小足臣、塩手臣、大口臣、大人、此大人を、大人と訓す、是にてイカヒの義知るへし、イツカヒと、ツを加へていふは、猶つよく云意也、しかと^ヲしつかと、ひたと^ヲひつたと、などの例なり、物の数多^キをイカヒコトといふも同義、紀大人は天智紀十年御史大夫と見えたる人なり

○女子の詞に、米をうちまきといふは、ことたかはぬに似て誤なり、うちまきとは神なと祭る時の散米をいふなり、なへのよねを、うちまきとはいふへからず、うつほ物かたり藤原君の巻云、はら^被へすとも、うちまきによねいるへしと云々、うちまきといふが、即米の義ならば、うちまきによねいるへしといふへからず、此文義に知るへし、源氏物語、紫日記、等にいへるも皆散米の事也

○今俗寒氣にふれて、手足の赤くなりたるを、海老のやうなといふも古語なり、うつほ俊蔭巻に、ちいさき子の、雪を分て、足手はえびのやうにてといへり

○俚諺に酒の酔本性わすれすといふも、同初秋巻に、うへ、御かはらはしめさせ給ひて、ゑひ人どもわすれぬ事ありとか仰られてと云々 古き諺と見えたり、文人之酔不能^ス藏^ス其辞藻^ヲ武毅之人酔則不能^ス隠^ス其剛勇^ヲといへるも本性をわすれぬをいへり

○人の妻を、御内方^{イッ}といふも、同棲のうへ下^ニに云、むかししげのゝわう、ふるのあそんのないほうは、我をばにいまそかりし云々

○今諸候の行列に、御馬前^キなどに、立ならぶ歩侍^{サヒ}を手ふりといふも古語なり、同祭の使の巻に云、おほん馬とも引たて、手ふりどもたちならみたりといへり

○盆供に、水の米とて、わせのよねを用る事も、ふるきためしなり、初秋の巻に、御^{盆也}ほには、わせよねをおほせつかはす

と云々

○器に食物を盛^をを、今、俗よそうといふも古語なり、同蔵開卷に云、まづこのかゆす^粥りてんとて、そへたりつるつき^杯ともに、よそひてみなまいる云々

○俗よきほどなる物を、手ごろなといふも古語なり、同卷に云、上達部、みこたちの、みむすめなれど、おやもものしたまはす、たゞおとどにかゝり給侍しかば、今かゝり給へど、手ごろの家なんなければと云々

○酒を^{アツ、ムル}煖を、かんするといふも古語なり、同国譲^下に云、さけ^樽そんにいれてすへて、御かんしてわかしつゝのますといへり

○ふところ子といふも、同卷に云、いでや子ども、廿人にかゝりてもて侍れど、そこをば、ふところといふばかりに、おふしたてと云々

○俗疏略になるを、そでになるといふも、同樓のうへの卷に云、京わらはへを、^{や敷}ようしほりかり侍りつるに、おやあり、そでになさんと、はゝにて侍るものゝ申しかは云々

○世俗に、正月三ヶ日があひだ^{フレイム}言忌して、ねるを、いねつむといひ、おきるを、いねあくるといふも、近俗ならず、長明四季物語十二月の段に云、つとめてのとしは、かりそめにたゞいふひとふしも、やんごとなくことふきて、伊勢、賀茂山、野々宮、など思ひやりふかうただられて、いねておくをも、いねをつむといひ、又ぬるをも、たはらかさぬるといひ、もちひをかゝみといひ、なくを若水あくるといひ、うたるゝを、こゆるといひ、かれいひを、あしはらといひ、其外何となきそゝろけきことくさはやゝあとなき御つほねのうちよりまなひとりてしことなるへし云々

○正月十五日に、小豆の粥を食し、又其粥にて、諸社の札を押す事も、同書云、十五日のつとめては、御づし所の御かゆ奉れる、七くさの御あつものも、けふまでとゞめおきて、ひとつ御かまにて、^調とうしなして奉れば、しるしばかり、御いきふきさせ給へり、此事推古の御代よりある事にて、あかきは陽の色をかゝせ給ふ御事にて、あづきの御かゆたまはらせ

給ふとぞ、冬の陰の余氣を陽德にて消させ給ふころなるへし、山の上のおくらといふ人の奉れる歌に、春くれはあかきおもものゝあつものもめくみにもれぬ御代にあふらし（頭書、此憶良歌出所可考）とよめるも、あかきおもものは、あづきの御かゆなるへし、又松の尾の神人、けふのひるつかた大内にまうで、神かんつかさの伯にものして札奉れば、賀茂山ヲサス我み山のあふひの根をね堀ごして、其ねごせるを、統坂そくひのうちにいれて、御札をもやのはしらに伯してはらせ申せば、又つぎ／＼のたよりあるべきかたにも、はらせ給ひ、なへて公卿の家／＼にも、此ためしまねふへし、其そくいひは、七くさのあつものゝ残れる、又けふの御かゆをひとつにすりませて、御札をおさるゝあり、定れる例は、御いきふれさせ給へる御ましすべりたるにて、おす事とこそ、是もはら、いかづちいなづまのたゝりをやらはせ給んと、松の尾の御ちかひおはしますとの御事なるへし云々

○又十六日は、やぶいりといひ、或は節セツと称し、親戚宴会して、子女福引といふ戯をなす、今按に、類聚国史卷七十二云聖武皇帝、天平三年正月辛丑正月朔丙戌ナリ天皇御大安殿宴五位已上辛丑ハ即十六日ナリ一晚頭移幸皇后宮○以賜酒食シテ因令採短籥書シテ以仁義礼智信五字ヲ随其字ヲ而賜物得仁者絶也、義者米也、礼者綿也、智者布也、信者段常布也、云々短籥をとるとは、今所謂闕クワツどり歟、固如此形をいふにや、是今俗のいふ福引に似たり、又讚岐典侍日記云、扇引、こよひはさはと仰られしかは、あけんが心もとさに、こよひとおもふに、人たちのけしきの、くらくて見えざらんこそ、口をしうさむらへと申しかは、つとめて明るやおそきとはしめさせ給て、人たち召すゑて、大式三位殿、しづめてゐあはれたりしに、先ひけと仰られしかば、ひきしに、うつくしと見しを、えひきあてど、中にわろかりしを引あてたりしを、うへになげ置しかはかゝるやうやあるとてわらはせ笑ふ云々、此時已に、扇引といへり、是等の事をまねひつたへて、今の福引の遊びはあるなるべし

○今民間兒女の戯遊、正月にはねをつきかぞふるに

ヒト。フタ。ミ。ヨ。イツ。ムウ。ナ。ヤ。コ。ノ。トヲといふ是も古語の残れるなるへし按に鎮魂祭神楽歌、次云

ヒト。フタ。ア古語ニテヨ。イツ。ムウツトユ通今俗所謂ムユ日ナ、。ヤ。コ、ノ。

口峰西川行幸和歌序ナタリヤタリハ十ノ古語ニテ足ル之ツの年この秋ト書リ義敷トヲハタリノ転したる歟

十度読テ之毎度中臣玉結也云々 此古語の遺称なるへし、鎮魂祭之事、旧事紀天神本紀天孫本紀、等をかうかへあはせてしるへし

○手まりといふ物も、いにしへより翫ものと見えたり、四十二物諍歌に貝覆と、手鞠と、いづゞぎ 皇宮大夫

へ黒髪のみたれてさはくまりよりも貝におはへる袖はなつかし

又増鏡うち野の雪の巻に云、摂政殿さへわかくものし給へは、よるひるさむらひ給ひて、女房の中にましりつゝ、らんこ、貝おほひ、手まり、へんつぎ、などやうの事どもを思ひくにしつゝ日をくらし給ふと云々

○小石にて、はじきといふ遊びをするも、今俗ならず、いと古代より伝へし戯なり、うつほ物語祭の使の巻に云、中のおとどに、かうしんし給ひて、をとこ女かたわけて、石はじきし給ふといへり、和名鈔雜芸類云、彈碁一名ハ始ル自魏宮

云々是歟同書に旛フナ和名以之波之岐 是は征戰之具也石彈の名是にならふ成へし

○又いしなごの遊びも久し、拾遺集に云、東宮いしなごりのいしめしければ、三十一をつゝみて、ひとつに一文字を書付てまゐらせける云々又榮花物語に、御前にめしいで、碁双六うたせ、へんつがせいしなごりせさせて御覽すと云々、赤染集に女院の姫君ときこへさせし頃、いしなごりの石めすをまゐらすととあり、散木集に、伊勢斎宮に侍る頃、いしなごりの石合せといふ事を、せさせ給ける後、ちいさきさうしのいしなごりの石のおほききなるを作りて、十の石に一つ、書付侍りける十首の中

君かためゆた野をわけてひろひつる千引の石にたれかあふへき

○雛遊ひ事尤久し、崇神紀に武埴安彦が謀及を告る歌に、比売那素寐須望といへるを、釈紀云、為兒女之遊今案比比奈遊也云々 此説いかゞ野客叢書卷七曰沈約宋志謂、旧記郭虞有三女、於三月三日俱亡、故俗忌此日、皆於東流水上祈攘祓潔云々 恐クハ雛祭此郭虞が事による歟、今兒女紙人を制し翫も、もと贖の義にて祓の具なり、加茂保憲女集に

へ大ぬさにかきなてなかつあまかつはいくその人のふちをしるらん

此あまかつといへるは、今遣子つぐこ雛といふ物のたくひなり、加茂保憲は清明か師にて、天文陰陽の祖也、其人の女としてかくよめるにしろへし、又和泉式部

あまかつにつくともつきしうき事はしなとの風そふきもはらはん

其外三月上巳のはらひの事はうつほ物かたり菊の宴の巻に云、かくてやよひの十のよ日ばかりに、はじめての巳の日いできたれば、大将どのは、上巳のはらへしに難波へ、かたぐをとききんたちものこりずくなくおはします云々源氏須磨巻にも、巳の日はらひの事見えたり、本朝もいにしへは巳の日を用ひしがのち〳〵三日を用るも、もろこしの例にならふ成へし、今祓の義なく、酒飯をまうけ宴会をこととするは、俗曲水の宴に混合するなるへし曲水宴ハ顯宗
帝元年始又雛を九月に翫も

漢人被除亦有、在秋間者とも見えたれは共に祓の義なるへし雛遊びの事ふるく物に見えたるは、うつほ物語楼のうへの巻に云、ひいなあそひなど、もろともにして見せ奉り給ふとあり、又斎宮女御集に、うちにおはせし時ひゝな遊びにと云々、蜻蛉日記に、かとりひゝなきぬ三ツ縫たりとあり、中務集にもひゝなあそひに見えたり、御堂関白集に、たかまつの君の御もとより、ひな屋まゐらせ給ふとも、又若宮のひいな屋、さま〳〵の物うゑなとして云々、源氏、枕草子に見えたるはさらなり、又此雛の仮名、うつほ物かたり、源氏、枕草紙などにはひいなと書、斎宮女御集、蜻蛉日記、中務集等には、ひひなと書たり、いづれか是なるをしらず、まして正字は無所見、契沖師いはく鳥のひなといふ時、ひゝなといへる事見及ねど、ひゝと聞へて鳴ものなれば、ひゝなきを略して、ひゝなといひて、それを猶略してひなといふにや云々、今案にうつほ物語藤原君巻に、春を出てねくらしらぬひな鳥もなそや暮行ひよと鳴らんとよめり

契又いはく、鳥のひなは、ちいそういたひけしたれば、装束の形などを、ひながたといふ、是を思へばひゝなも、屋形人形より、よろづちいさういつくしきを、雛にたとへて名付たるにこそと云々、契沖はひゝなひなの仮名を同心せられし歟、今案に釈日本紀に比比奈と書るも拠あるにやあらん

難遊の異説、寺島氏云、或書云、敏達天皇二年春正月、侍從奉勸難像、太子親取難像、分其男像女像、下略

今案に、此或書といはれしは聖皇本紀の説にて、信用にたらざる物なれば今悉く之に載せず

大成經第三十五

多田氏云神功皇后三韓ヲ平伏シ玉ヒ筑前国宇瀬郡蚊田ニ漂着シ玉ヒ此所ニテ普田天皇ヲ御誕生マシマシ、夫ヨリ御帰京アラントテ、難波津ニ御船向フトイヘトモ、事アリテ御着岸ナリカタク武内カ母方ノ本国ナレハ紀州名草郡粟島着船シ玉フ今案に、紀氏系図に武宿禰者紀伊国名草郡宇治郷人母山下陰女云々しかれば其由緒はさる事なれとも皇后の御船紀州名草郡に着給ふ事日本紀古事記旧事紀等に見えず何に拠て書れしにやもし粟島難、付会之説をまうけんための杜撰にやいふかし、日本紀云命武内宿懷皇子横出南海泊于紀伊水門皇后之船直指難波于時皇后之船廻海中以不能進云々其後広田生田住吉等の神を祭り給て則平得度海皇后詣紀伊国会太子於日高云々名草郡と日高郡は南北之違なるへし

然ル処御産日久シク、御船中ニマシマセバ、シキリニ御帶疾発テ、医神少彦名命ニ是ヲ祈リ玉フ、御身バカリニテモナク、

御子普田天皇ノ御為ニモト、御撫物ヲ作テ、御形代トシ、海流シ御安全ヲ願ヒ玉フニ、玉妹安全、皇后モ御帶下平愈マシクケリ、此故ニ御産筑前ノ蚊田ノ地名ニヨセテ、此所ヲモ加田ト云、今ノ世蚊田粟島ト云ハ是ナリ、サレバ此時御母子ノ御形代、鄙ノ旅ニ瘦玉フ御形ユエニ、難ノ字ヲ書テモヒイナト云ヒナノ義也

今案に形代は和名祭祀具偶人ヒトカタ即神功紀葛靈をクサヒトカタと訓しいにしへ形代をヒトカタといひし事明らか也鄙の旅にやせ給ふ御形なればヒナといふとは迂遠なる名目義も又通せずしてうけかたし難ノ字を書てもヒイナ云ヒナノ義也とは猶以其義通せず

サレバ、粟島ノ社ニヒナヲ捧テ女人ノ病ヲ祈ル事、此時ヨリノ起原ナリ、緒コソヒナハ夫婦ニアラス、御母子ノ御形ナリ、一ツ身着タル童躰ハ八幡宮ニシテ、前張キタル大君躰ハ神功皇后ニテゾマシマス云々 下略

○難遊ひの具に、飯盛小器を、おつはと云も、うつは物かたり国譲巻云、宮たちの御まへに、沈のをしきして、るりの御つ

ほにてものまゐり給ふ云々契沖いはく、御つほとは、稚子の物くぶごきの名也といへり、今云おつほの名しるへし

○なぞ／＼の遊びも久し、拾遺集に、なぞ／＼ものかたりしける所に「我ことはえもいはしろの結び松千とせをふともたれかとくへきとあり、玉篇謎、米閉切、隱言也とあり、和訓の意は、なんぞ／＼と問かけて、其意をあかす故、なぞ／＼といふとぞ、なんぞをなぞといふは、古今集に、なそ世の中の玉たすぎなりとも、なぞわかこひのかひよとぞなくともよめるがことし

○節分の夜門戸に鯛のかしら柵をさしはさむ事、土佐日記に、けふは都のみぞおもひやらるゝ、こへのかどのしりくめな

はなよしのかしら云々しかれはいにしへは、鯛のかしらを用しと見えたり、又杠谷樹ビ、ツキの事、今案に和名鈔ニ石楠草和名トヒ

俗云サ
クヤムサ

云々、東雅云、石楠草はいにしへ除夜、民家の扉ヒツに此木をさせば疫氣を除ふといへりと云々、しかれは此木を和

名トヒラノキといへるも、扉にさしはさむ故成へし石楠草は、今俗にサクナケといふ物なり、今も大峰にまうづる者これをとり歸りて門戸にかけ置て、疫氣をはらふといへり、いにしへの遺意なるつし、されはナヨシを誤りてイワシとしトビ
ラノキを誤て、ヒ、ラギを用る事になれるにやあらん、トヒラノキ古く歌にもよめり、範兼童蒙抄云山寺ノ南面テニ、石
楠草ノアリケルヲ、客人ニ是ハ知り玉ヘルヤト問ケレバ、トビラノキトナン申トイヒケレハ、坊主ノヨメル

ウエタテ、アケクレミレトシラサリキトヒラノキトハケフソキ、ツル

類聚抄にありと云々、さて鯛ひゝら木を用る事も又既に久し、長明四季物語云、いわしのはさみもの、ひらきのほこは、
なやらふ家には、百敷ならてもある事なれとも、大内にはかにもりのつかさ、例としてつかうまつれり、此なやらふ事は、
もろこしにも侍れと、わきて我國には、神たけのすへらきの六と世の春より、ものし給ふ御事にて、いみしき御ためしな
り、ひゝら木は、我神の社の、あるはみぞろの池のあたりより奉る事、定れる故実となれり云々、又節分に鵜鳥ツグミを喰事も、
同書に云、ついなニの夜は、をけらのもちいひ五条天神勝餅つぐみの鳥など焼て奉り、御かれいひのまはりに奉れば、是
もものゝけ、えやみ、をやらびぬへき本文侍るとなん

○俗に声を、こはいろ、こはづくる、こは高なといふも古語也竹取物語に云、かくや姫はいく、こはだかになの給ひそと云々旧本忠峰集に「山さとの秋こはたかになくものはつままとはせる鹿にそありけると、よめり遊仙窟大語と書り宇治拾遺第二清徳聖千手だらにを、こはだえもせず誦し奉りといへり、又こは高なるを、わゝしきといふも、増鏡浦千鳥の巻に云、行幸の当日に、左大将内経、花山院右大将定行、列をあらそひて、隨身どもわゝしくのゝしれはと云々

○冷をつめたきといふも、俗に似て俗ならず、玉葉集に

「雲をいてゝ、我にともなふ冬の月風や身にしむ雪やつめたき

とよめり、弁内侍日記に、南殿のかたぎまにて、遊ひしに、左衛門の東のかたに、霜のしろくさえたりし、さむくつめたさかぎりなかりしも面白と云々又云、次の日くれほどに、かれより、うはがきにはあしつめたの御かたへとかゝれたると云々

○今あき人などのもてあつかふ、うちがひといふ物は、もと鷹野に出る犬飼などのもたる助飼袋といふ物にもとづけるなり、今打違なと書は誤なるへし、定家卿鷹三百六十首に

物数をしつるしに犬やりのうちかひ袋うちかひもなし

犬の鳥を追出して、かみたつれば、飯にこぬかをまぜて、一づゝ飼ふを、うちがひといふ也、それを入れるゝ物故、うちかひ袋といふなり、今は金銀銭などを入もてありく物とす、されどゐなかうどは、こりめしなどを入るゝ事有、却而古意を存に似たり

○或人問云、男女の中に、おもひかはし、いひかはし、などいふ詞此かはしは、かやはしの中略にて、通の字敷、即曰さもあるへし、但し、今いひかはしといふ、語意を思ふに、通はしにては、すこしかろくやあらん、和名鈔に肥後国、合志加波此義なるへし。

○今俗人を頼むに、手すって頼むといふも古語なり、竹取物かたりに云、竹とりをよひ出して、むすめを我にたべと、ふ

しをかみ手をすりの給へは云々

○俚俗、手の大なるを、熾斗フナカキのやうなるといひ、足の大なるをくはびらといふも古俗なり新猿樂記云、手如ハク鉄鉦カナカキノ足如ハレ鉄枚クヘウといへり、和名鈔附 アナと有、フナヒラハ足枚也ナとノ通ス枚ハ平ナリ鉦ハ和名出ニ農具ニ熾斗ハ鉦ヲ誤シナリ鉄枚ト鉦農具ヲ對シテイエルト見エタリ 又太秦牛祭祭文云、柎槌頭仁木

冠乎戴支久波比良足仁旧鼻高乎絡付云々尤古キ諺なり、世伝云、牛祭祭文ハ、伝教大師作といへり、新猿樂記ハ學士藤明衡作云々

○鄙俗の語に、手足をエタといふも古語也、水鏡武烈天皇の段に、四ツのえだを木の枝にはり付てとあり、其外古ふみともにくらも見えたり、和名鈔和名肢體衣太云々 契沖師云与ニ枝條ニ同訓四肢之於レ身猶如ニ木之有ニ枝條ニ云々

○俚諺に、よく肥たる女などを見て、うまそうなといふ、万葉集作者に、少令史田氏肥人ウマヒトといふあり、是等の訓よりおこる歟

○兒女の談に、もろくの虫、玉虫を恋ふ、玉虫いはく、ともし火をもりて来らんものに逢んと、故にもろくの虫火をとらんとして死すと云々 此事近俗ならず、古今集第十一夏むしの身をいたつらになす事もひとつおもひによりてなりけり 教長卿此歌の註云、世俗に玉むしの火をとりて来らん虫にあはんといへは、とりにくとて、火に入て身をほろほすなりといへり、たしかの事ならねど、此歌は其心と聞えたりと云々、いとふるくもいひ伝へし事としるへし伊勢集に

夏虫のしるくまと思ひをはこぬかなしと誰か見すらん

○世俗に、いたく泣を、さめくとなくといふは、雨のふることく泣といふなり、雨々と書へし、古今集春下大伴黒主、春雨のふるはなみたかとよめり、又しくく泣といふも、近俗ならず、右京大夫集に云、はかなかりし人の、水のあはとなりし日なれば、れいの心ひとつに、とかくおもひとなむにも、我なからんのち、たれかこれほともおもひやらん、かくおもひし事とて、思ひいづへき人もなきがたえがたくなしくて、しくくと泣より外のことそなき云々、又おひくとくといふて泣といふも、讃岐典侍日記に、堀川院かくれ給し所に云、たゝおはしますらん所へ、我を召せや、おひくとく

どきたてゝ泣るゝ音すと云々、又海士の刈藻物語に云、ひきあけて見給へは、からだもなく、紫雲にうつり給ひぬ、ひしりかなしくておう／＼と泣給ふと云々

○利口なるを、人に口明さぬといふも俗ならず、源氏はゝ木の巻に云、ざえのきは、なま／＼のはかせはつかしく、すへてくちあかすべくなん侍らざりしと云々

○諺に、いたくよりはりたるを、縄にもかづらにもかゝらぬといふ、顯宗紀云、氣力衰邁、老髦虛羸、要仮扶繩、不能進歩、云々、うつけ者なといふもこゝに知られたり、神功紀無実とも書り

○俗、人群集する時、エイヤ／＼と云、今案に、内宮六月十五日荒禰御覽神事歌云我君乃御倉之山爾塩乃満如富古曾入座、恵伊耶、恵伊耶、是等の古語の遺れるなるへし

○竈を、へつといふも古語なり、神樂歌に

止与倍津以、美遊比須良志久堅乃と云々

○千秋万歳千箱玉といふは宣化紀白玉千箱といふ語あり

○俗に、事繁をあつかましきといふ、散木集に

へ世の中のおつかはしさをあせかけは黄なる泉に思ひけぬへし

とあり、マとハと通韻、是今いふあつかまし敷又別意有歟

○範兼董蒙抄云、白毫式、云天竺に術婆迦と云童子あり、其母年頃后につかふまつりけり、此童おもはずに后を見奉りけるより、いかてと思ふ心つきて、人しれずいもねす瘦ゆきけり、母あやしみてとへど、いはずして物おもへる気色あらはなり、母のいはく、何によりてか我にかくすべきとせめければ、ありのまゝにこたへけり、母思ひめくらしていはく、江のほとりに行て、日毎にいをゝ釣れ、我取次て后に奉らんとをしゆ、是によりて日毎に鯉を釣てきたれば、母これを后に奉る事三とせになりぬ、后志のふかき事をあはれひて、よきひまにとひ給ふ、いかなる事を思ひてするわざぞと、母おそれ

ながら、此童のおもへる事をもらし申、天竺のならひ、心に思ひ言葉にいひ出る事を、たがへざりければ、あふへきよしを契り給つ、后たよりをえん事かたければ、はかりことをなしてのたまはく、術婆迦先自在天神にまゐり、其宝殿のうちにかくれをき、参りて逢んと契りて、みゆきして自在天神の宝殿に御輿をよせて、一夜すこし給ふ、人しつまり夜更て后術婆迦かをる所に行給ふに、ね入てしらす、其しるしに玉のかんさし一すぢを置いて、輿のもとへ歸り給ぬ、又行給へるにおとろかす其しるしに又かんさし一すぢを置いて歸り給ぬ、こゝに母、術婆迦にとふに、寐入ておほえず、たゞ此玉簪はかり有とこたふ、母、今は力およふへからずといふを聞て、術婆迦胸より火出きて、もえてけむりになりてうせぬと云々、彼鯉を釣て、ことを、通せしより、こひとはいふなり、もろくの恋のおこり、此術婆迦よりはしまれり云々、又恋にもゆるおもひ、恋のけふりなといふも、此事により六帖に

こひくゝてひとこひくゝに恋しなはもえん烟はこひの香やせん

此術婆迦が事、康頼宝物集にも見えたり、又俚語に、バカと云言葉も、此術婆迦がことよりおこると、仙源抄に見ゆ一説東雅云癡をバカといひ、無智をバカラシなど云は、梵語と声音通す、梵に慕何を翻して、癡といひ、摩訶羅翻して、無智といふと云々

○万葉集第七

しまつたふ足はやふ船風まもりとしはやへなんあふとはなしに

童蒙抄に此歌を注して、舟の腹をあしといふといへり、今船に物積たる多少によりて、船の足が入る入らぬと云詞近俗ならす

○今俗に、女のなまめきありくを、尻ふつてあるくといふも、万葉集第十八に

へさと人の見るめはつかしさふるにさととはす君かみやてしりふり

佐夫流子は遊女の名なり、仙覺抄云、さととはすとははやくとふ也、しりふりとは、あるくとして尻をふるなり云々

○俗髻^{モミリ}をタブサといふも、景行紀頭髻^{ミツサカ}と見え、崇峻紀作^ニ四天王像^{ノミタ}置^テ頂髻^{タツサカ}とも見えたり

○今俗、炭火をオキといふ、日本紀私記炭火オキビと訓ス古語なる事知るへし、和名鈔云塘煨^{和名於岐比}熱灰新火也云々新撰

万葉^{ヒトコト}に人緒念^{オモフコノオキハミ}心之熾^{ヤクセ}者身緒曾^{ヤクセ}焼烟^{ヲクセ}立砥^{タテ}者不見^{ヘミ}沼物^{ヌモノ}幹^カ、小町は、おきのゐて身をやくよりもかなしきはともよめり又炭火^{オキ}

を割^レはわろしといふ俚諺も古く見えたり信明集に「手つさひに火桶のおきやわりにけん恋しき人にあはぬころかな」とよめ

りオキビはオコリビの約コリの反キ^{オキハオキ}ヒノ下略

○灯花をば丁子頭といふも近俗の語にあらず今物語に^{信実朝臣作}待賢門院の堀川、上西門院の兵衛おとゝひなりけり夜ふか

くなるまでさうしを見るにともし火尽たりけるにあふらわたをさしたりければ世にかうはしく匂ひけるを堀川

ともし火はたきものにこそ似たりけれ

といひたりければ兵衛とりあへず

ちやうしかしらの香やにほふらん

と付たりけるいとをかしかりけりとあり又此丁子頭といふもの出来れば外よりよき物くるゝといふ俚諺も西京雜記卷三云

樊將軍会問^テ陸賈^ニ曰^ニ賈応^レ之曰^ニ目^{マレロクハ}瞬得^ニ酒食^ヲ燈火^{ハナサケハ}華得^ニ錢財^ヲ云々是なり

○女などのうらむる事あるをそれともいはずすねて居るを人をふすべるといふも古語なり蜻蛉日記に「もしはやくけふり

の空にたちぬるはふすへやしつるくゆるおもひに、などとなくさかしらするまでふすべかはして此頃はいとゞ久しう見え

ずと云々枕草紙にくるしげなる物おもふふたりもちてこなたかなたにうらみふすべられたるをこと云々元真集に久し

うこずとてふすべて出ぬ人にと云々是等見つへし又すねるといふは、古語にくねるといひし転語なるへし、クとスと同韻

通す源氏紅葉賀にまつくねくしうらむる人の心やふらしと思ひてと云々、紅梅に云うるはしうもあらぬ心はへうちま

しり、なまくねくしきことも出くるときくあれど、云々是等今俗すねくしといふ意と聞ゆ

○所ボツソクといふは、南朝の准后親房公、東奥を治給ふ時、地下の由緒を捨す用ひて、国人の筋目を正し、座を定、椀飯

の儀式をたつる、是を所法則と云

○俗に溝をセ、ナギと云も、顯昭陳狀に、かひやがしたの事を論する詞に云、かひやがしたとは其屋の下敷、それも蛙鳴てんやと尋侍しかは其下にはみぞせゝなぎなどもあれは蛙すみて鳴事一定なりと云々

○俗、笑ひいりたるをキウ／＼いふて笑ふと云、狭衣に、そゝはしるなればきぬのすそをひきとゝむるにや、たふれぬ、きう／＼とことさゝめき笑ひいりつゝといへり

○俗に、妾をめかけと云、同書に、さやうのほそきんだちのかけめにておはせんよりは、たゞこゝろみ給へおとどの御さいはひにてこそおはせめと云々、いにしへかけめといひしを、誤りて今めかけといふなるへしてかけは、めかけの転語なり、かけめとは陰女の義敷萬葉に隱婦とよめり

○蜻蛉日記にそんわうのひがみたりしみこのおとしたねなりと云々おとしだねおとし子など今俗にもいひ伝へたり

○世俗に、何ヅク彼ヅク錢ツク金ヅク、などいふ詞も尤太古の詞と見えたり、古事記応神天皇段云汝有得此娘子者避上下衣服量身高而釀麴酒亦山河之物悉備設為字札豆玖云爾云々遊仙篇云且取双六局来共少府公賭酒僕答曰下官不能賭酒共娘子賭宿云々

○鄙俗の語に頬を、ほゝかまちといひ又打擲を、ハルといふ、たとへはホ、カマチハルなどいへるも、いにしへよりの俗語と見えたり今物語に云伏見中納言といひける人のもとへ西行法師行てたつねけるにあるしはありきたがひたる程にさむらひの出で、何事いふ法師そといふに、ゑんにしりかけてゐたるを、けしかる法師の、かくしれがましきよとおもひたるけしきにて侍ともならみおはせたるに、みすのうちにさうのことにて、秋風樂をひきすましたるをきゝて西行此さむらひにも申さんといひければ、にくしとはおもひながら立よりて何事ぞといふに、みすのうちへ申させ給へとて

ことに身にしむ秋の風かな

といひたりければにくき法師のいひことかなとてかまちをはりてけり後に中納言歸りたるに、かゝるしれものこそ候つれ、

はりふせ候ぬと、かしこがほにかたりければ、西行にこそありつらめ、ふしぎの事なりとて、心うがられけり、此さむらひをばやがておい出しけり云々 和名鈔云、顰カク和名加波知 又云顰カク顰カク骨也或云輔車ツラカマ云々 海士の刈藻物かたりに、あまりにはしらのたちければにや、侍従をひきかなぐりうちはりなどしてといへり

○俗浴ユバするを、ゆかはといふも古語也、允恭紀に沐浴ユカバ

○物書たるがつたなきを、みみずのやうにといふも、信明集に云かへりことに、みみず書をしておこせたれはわひしきに恋にまどへる心にはそのことゝしもみえずそ有ける

是も手のわるきをいへり、蚓の跡の土に残りたるやうに、その事とも見えかたきとなるへし、又鳥の足がたのやうにといふも、松蔭中納言物語山の井巻に云かぎりにこそ侍れ、我ゆゑに御つみのふかくわたらせ給はんこそ心にかゝれと、鳥の足がたのやうにいとほはなく書たりと云々

○手をテ、といふも神楽歌に大宮乃知グイサコトナリ以左小舍人ササノヒト手々テ仁也ニヤ手々テ仁也ニヤ玉奈良タマナラ婆手々バテ仁也ニヤと云々 袋草紙にてゝゑひあしゑひ我ゑひにけりともよめり

○日本紀私記神武大急之波世志と訓す今俗セハシ、といふ詞是歟シとセ通ス

○児女の酸漿ホトケをふく遊びも、いにしへよりの事なるへし 柴花物語に云御いろしろうるはしく、ほゝづきなとを吹ふくらめて、すゑたらんやうにぞ見えさせ給ふといへり

○僧カレンの隠女ある、其女を、大こくと云は一書唐鄭熊ショウ番遇雜記有ニル僧妻ニル者謂ヲ火宅僧ニルといへり、是等を仮名書物に見誤りて火たくの火ヲ大トよみたコト誤り、大こくといひ伝へしにやといへり

○諺に人のなさは世にありし時といふは菅公御百首

へあはれわかうき時つるゝとももかな人の情は世にありしほと

○又あはひの貝のかたおもひといふは萬葉集第十一

伊勢の海士の朝な夕なにかつくてふあはひの貝のかたおもひにして

とよめり此歌より出し諺なるへし

○俗、水へ物の落る音をズブリといひ又ザブリなどいふも、近俗ならず大和物語をとめ塚の段に、此ひらばり、川にのぞみてしたりければ、つぶりとおちいりぬといへり、又宇治拾遺第三に此わたりし船に、廿余人の渡る者つぶりとなげかへしぬと云々又第十一に西に向て、川にざぶりと入と云々又物のだぶと落るなといふは、塔落と書へし、字彙塔託甲切、物墮声とあり

○心にすゝますしてなすわさを、しぶくにするといふも近俗ならずおちくは物語に云御文とて給へばしぶくにとりてといへり、又宇治拾遺第五に、童しぶくに法師になりけりとも見えたり

○小兒などの泣べきおもゝちするを、かひをつくるといふも同巻に彼童の法師になりたるをいふとて云、つゆむかしにかはらす、僧正うち見て、かひをつくられけりといへり

○藥稽を、すべといへば左言にやと思へばさにはあらざるへし、同巻第七にあるにもあらず、手ににきられたる物を見れば、わらすべといふ物たゞ一筋握られたりと書り又燈心を、とうしみといふも柴花物語こまくらへの巻になぬかゞうちにやかてまんどろあせさせ給ふへければあぶらとうしみまでもてのほらせ給ふと書たりとうしんといふは却而あしゝ和名鈔燈心和名度宇之美とあり又教るをおすへるといふも浜松中納言物語第一に云ふけうのつみいとおそろしとおすへさせ給ふと云々

○何方もといふへきをドッコモといふも此頃の俚諺にはあらず幽斎翁九州道記

宗易

へあまさかるひなの住ると思ふなよとつこもおなし浮世ならすや

返し

幽斎

へあまさかるひなには猶そゐたむなきとつこもおなし浮世なれとも

ゐたむなきは今俗のいふるとむなき也是は今所謂狂歌の躰なるへし、しかれとも、今の世のことからにはかはりて、一首の意俗ならず、今狂歌を好む人に、狂歌といはずしてひなぶりなと称する人あり是は狂歌の字を嫌へるにや、又名目の拠なしと思へる歟、ひなぶりとは神代紀下照姫の歌を夷曲ヒナブリといへるをおもへる歟、しかれとも、古今の序に久かたのあめにしては、此歌にはしまるよし、和歌の始とも貫之ぬしの書れしを、いかて私に狂歌の事とすへき狂歌といふ名目にしへに拠なきにあらず、喜撰式云、病苦雖レ不レ去又有何過然而詠誦声不順由也誠是狂歌云々又明月記建保三年八月廿一日参内——按察可レ参之由女房申ス之忽押テ連歌被待参之間有狂歌合云々略文しかれば是等を名目の拠にてたゞいひならはせるまゝに狂歌とぞいはまし

○人の口に物をふくみたるをホ、バルと云も古語の転なり、万葉集第二十にこのてかしはのほゝまれどゝよめり、マとハ通レとル通ズホ、バルと同語、是はこのてかしはの芽の開へき程になりたるが人の口に物をふくみたるかたち似たればしかよめり人にツボロナといひ花にツボミといふ花の咲開ケも人の口をひらき、又ゑむに比していへり

○俗に、物の相応せるをふさふといひ又ふさはぬといふも古語なり、古事記上、日子遲ヒコナシ神歌許ミコレハ礼婆布佐波受ハフサヘズとあり又万葉集第十八へあづまをさしてふさへしにと云々

○枕草紙に、過にしかたこひしき物、ふたあゐえびそめなどのさいでと云々後撰集秋詞書に紅葉と色こきさいでをと云々榮花物語鳥辺野の巻に、さま／＼の色のきらめきたるさいでなをつくりたるやうにと云々袖中抄にも其さいでをとりてといへり此さいでとは絹切をいふしかるを、今俗鍛冶の家に、つぎ切をさいでといふ是等はきはめていやしきものゝ口に雅語の残りて、おもひもよらぬ所に聞侍しがをかしきなり

○今俗餅をアタタキといふ古語也新猿楽記に温餅アタタキと見えたり又鄙俗の詞に米をシヤリといふは古語を伝へ誤なり同書に表をシヤリと訓す

○諺に牛に引れて善光寺参りといふは一書に云善光寺旧記云むかし此国に齡七十に余る姥ありけり後世に志す事をもしら

で年月をくらしけるある時繰上^ゲたる布をさらすとて川辺に出けるに大なる牛はなれ来りけるが彼布を角にかけて走ければ姥大に驚跡を追ふて行ければ当寺の内へ入けり姥こゝに到りて始めて此御寺を見てこはいかに我此年におよふまてかゝるいかめしき御寺のありけるをしらさりけるよとおもひて僧徒にあひて事のやうを尋れば有かたき事かきりなし姥それより後世にもつきけると云々世のことわざに牛に引れて善光寺参りとかいふめるといへり今案ニ今昔物語震旦部第七云今昔震旦ノ予州ニ一人ノ老母アリ若キヨリ邪見深シテ神道ニ仕ヘテ三宝ヲ信ゼス世ノ人コゾツテ此^レヲ神母ト云フ三宝ヲ嫌^カ故ニ寺塔ノ辺ニ不^ニ近付^ニ若道ヲ行ノ時僧ニ値ヌレバ目ヲ塞テ過ヌ而^ル間^ツノ黄牛有テ神母ガ門ノ外ニ立リ三日経ルニ更ニ牛ノ主ト云者ナシ然レハ神母此^レ神ノ給ル也ト思テ自ラ出テ牛ヲ家ニ引入ントスルニ牛ノ力強シテ不引得神母自衣ノ帶ヲ解テ牛ノ鼻ニ繋グ程ニ牛引テ逃ヌ神母追テ行ニ牛入ヌ神母此^レ牛及帶ヲ惜^ムカ故ニ自ラ塞テ寺ニ入テ面ヲ背テ立リ其時寺ノ衆僧驚出テ神母カ邪見ナルヲ哀ム故ニ各南無大般若波羅蜜多經ト称ス神母此^レヲ聞テ捨テ走出テ逃ヌ水辺ニ臨テ耳ヲ洗フテ云我今日不淨ノ事ヲ聞ツ所謂南無般若波羅蜜多經也ト嘯^{イカリ}テ三度此事ヲ称シテ家ニ還リヌ其後神母身ニ病ヲ受テ死ス下略其後神母嫡女ノ夢ニ告テ曰嫌フトイヘトモ般若ノ名ヲ耳ニフレタル功德ニヨツテ忉利天ニ生セントス云々彼善光寺の旧記といふ物はを摸せる歟

○金葉集に大路に子を捨て侍りけるおしく^{ツ、ミ物也}みに書付侍りけるうた

へ身にまさるものなかりけりみとり子はやらんかたなくかなしけれとも

今世俗の諺に子を捨る藪はあれと身を捨る藪はないといへるも是より出たる成へし但し此藪といふををさなき人はたゞ竹林をのみいふと思へりさにはあらず和名鈔云呂氏春秋曰沢無^ツ水曰藪^{和名}也云々又荊をもヤブとよめり同書越中新川郡大

荊^{於保}とあり赤染集に

へしけかりし萩のやふこそ恋しけれしかはかりたに我宿はなし

是は萩のやぶともよめるに知るへし

○今俗物を譽るによう／＼と云今物語云下毛野武正といひける隨身関白殿の北のたいのうしろを誠にゆゝしけにて通りけるにつほねのさうしよりあなゆゝしはとふく秋にこそおもひまゐらすれといひたりければ此ことは未詳といふされといひてけり女心うげにてかくれにけり隨身所にて秦の兼弘にあひて北のたいのわらはにさん／＼にのゝしられつるといひければいかやうにのゝしれつるぞとはれてはとふく秋とこそおもへといひしといふに兼弘聞てくちをしき事のためひけるかな府生とのをおもひかけていひけるにこそ／＼み山出てはとふく秋の夕暮はしはしと人はいはぬはかりそといふ歌の心なるへしはしとまり給へといひけるにこそ無下にいろなくにかにのり給ひけるぞといひければいて／＼さては色なほしてまゐり来んとてありつるつほねのしも口に行て物うけたまはらんたけまさはとふく秋ぞよう／＼といひたりけるいとをかしかりけりと云々此よう／＼といへる今いふとおなしき歟

○俗に昨夜の事をゆふべといひて夕の字をひとつになせるは非なるへしようべともよんべともいふへし昨夜万葉晩上同又今夜をよさりといふはよし大嘗会田歌にたがよさり妻やと云々よさりと春されは秋さればなどいふかことし万葉集第七うはたまのよるさりくればと云々

○昨日をきのふといふは前サキノ日といふサを上略してノヒのヒをフと通してきのふといふかと思ひしを契沖師云日本紀昨日キス仁ニ昨夜キス神共ニキスとよみたればきのふとはキスノ日といふスを中略してヒフをかよはしたるなりと云々まことに万葉にはキスのスをソと通して伎曾キソ母モ許コ余ヨ比ヒ毛モまた伎曾キソ許コ余ヨ波ハ兒コ呂ロ等ト左宿サソク之香ノカなどよめりされば昨日をキスといふ故に明日をアスとはいふ成へし明後日をアサツテとは明日去又アスの日也源氏浮舟巻にあさつてばかりといへりけふとは此日といふコノノ文字を略してコとケ通していふなるへしヒフは前のごとし

○旧本今昔物語卷廿五云、今ハ昔、腹中ニ寸白持タル女有ケリ人ノ妻ニナリテ懷妊シテ男子ヲ生ケリ其子ヲハ名ヲ聞トソ云ケル漸長ヤオトナニ成冠ナドシテ後、官ヲ得テ、遂ニ信濃守ニ成ニケリ始其国ニ下リケルニ坂向ノ饗ナレヲ為タリケレバ守其饗ニ着テ居タリケルニ守ノ郎等モ多着タリ国ノ者共モ多集タリケルニ、守饗ニ付テ見下スニ守ノ前ノ机ヨリ始テ畢ハナノ机マデ、胡桃一

種ヲ以數ニ調ナシテ悉ク盛タリ守此ヲ見ルニ、為方ナク佗シク思テ只我身ヲ絞ヤウニス、然ハ思佗テ守ノ云、何ナレハ此
饗ニ、此胡桃ヲハ多盛タルゾト問ヘバ、國人ノ申サク此国ニハ胡桃ノ木多候也ト答レハ守弥為方無佗シク思テ只身ヲ絞ヤ
ウニス○此間減○○迷テ術無氣ニ思ヘル氣色ヲ、其国ノ介ニ有ケル者、年老テ、万ノ事知リ物オボエケル有ケリ、此守ノ氣色ヲ
見テ、恠ト思テ思廻ニ、若此守ハ寸白ノ人ニ成テ産タルカ此国ノ守ト成テ来タルニコソ有メ此氣色ヲ見ルニ極心不レ得、
是試ト思テ胡桃ヲ旧酒ニ濃摺入テ、熱ク涌シテ國人ニ持セテ、此介ハ、盃ヲ折敷ニ居目ノ上ニ捧テ、畏タルヤウニテ、守
ノ御許ニ持參レリ然レハ守盃ヲ取タルニ、介提ヲ持上テ盡ニ酒ヲ入ルニ酒ニ胡桃ヲ濃摺入タレバ酒ノ色白クシテ濁タリ守
是ヲ見テ糸心惡氣ニ思テ、此酒ノ例ニモ似ズ濁タルハ、何ナル事ゾト問ヘバ、介答云、此国ニハ、事ノ本トシテ守ノ下リ
給坂向ニハ、三年過タル旧酒ニ胡桃ヲ濃摺入テ在廳ノ官人瓶子ヲ取テ守ニ奉レハ守其酒ヲ食事定レル例ナリト事々シク
云時、守是ヲ聞テ氣色弥只替リニ替テ篩事無限然レトモ介ガ定リデ是ヲ食フ事ナリト責レバ守篩々盡引寄スルマ、ニ実
ハ寸白男更不レ可堪ト云テ散ト水ニ成テ流失ニケリ云々下略 あやしき物語なれとも古書にかくしるし置れし事ゆゑあるへ
し是を見れば胡桃は能く寸白虫を治すへし用ひ試て虚実をしらまほし又今俗伊勢へ參詣せし人の下向を迎ひに出て坂迎と
て饗する事有是は京都の人は逢坂までむかひに出饗する故坂向といふそれをならひて何方にても坂向といふ事となれりと
いへど前文を見ればいにしへ国守などの入府を国境にてむかへ饗するを坂向とはいふと見えなればもとよりいつくにても
さかむかひといふへき事也境迎の異語成へし逢坂の説は後人附会の説と知られたり
○今俗小鰕にアミ雑魚アミ醬と呼ぶ物此アミといふは此小鰕の名なり和名鈔海糠魚阿美とあり是成へし山家集に云備前
の小嶋と申嶋にわたりけるにあみと申物をとる所はおのくわれくしめて長きさはにふくろを付てたてわたすなり其さ
ほのたてはしめを一のさほとそ名付たる中に年たかき海士人たてそむるなりたつとて申なることばきく侍しこそなみた
こほれて申はかりなく覚えてよめる

へたて初るあみとる浦のはつさはつみの中にもすくれたる哉

和名鈔に所謂海糠魚^{アミ}是なるへし今海糠醬^{アミノシヅメカラ}備前を名産とする事も此山家集のこと書にしるへし新猿樂記にも備前海糠^{アミ}といへり又鳥にアミといふ物有袖中抄に

へみなくゝるあみの羽かひのかひもなく人を雲井のよそに見るかな

是は鳥なりあにともおほあにともいふといへり此鳥可考

○紐^{ヒモ}をひぼといふも片言にはあらず濱松中納言物語に云みすのほとにむらさきのかうのすそこの御几帳^ミうちあけてかうくみのひほながやかにうるはしきといへり

○今色めくなまめくなどいふ言葉は雅俗ともにいふことはなり此メクと云は向也^{ムク}メとム通あためくなといふはアは発語にてアダとは他也メクは向也^{ムク}他にむかふ也万葉集に異手枕^{アテ}なと書る同意

○俗大なる木などをちひさく切こしらゆるをコナスといふは木作^{キナヅ}なるへし此こなすといふも古語也うつほ物語俊蔭巻にいみしき女おきな子ともむまこなど居てかうへをつとへて木をきりこなすと云々

○しこふちといふ詞璣囊抄云日本紀忌部連色弗^{シロフチ}と云人アリ是ヲ見レハ色弗ト書ヘキニヤ件ノ人形躰ゲスシクシテシコブチナリケルヤラン云々此説いかゞ今案にうつほ物語祭使巻にしこふちにふるめきたる箱二つと云々俗にぢやうふなる箱といふに同じ醜物と書へし

日本紀醜女万葉ニ醜乃益^{シコノメ}雄鬼乃醜草^{シコノメ}など書り今俗健肥者をしこふつなる人といふもこれなるへし

○俗に少の事を露ちりほといふもうつほ物語吹上巻にいとけうある人に見たまへつきて露ちりも参り侍らざりつるといへり又露ほともいふも海士ノ苅藻物語に

へたのめ置しめしか原の露ほともあはれをかけて君たにもとへ